校内研修報告書

研修者	阿部成道
分掌・教科名	進路指導部・英語科
研修期間	平成26年7月27日（土）～7月28日（日）
研修場所	大阪府大阪市（河合塾大阪校）
研修テーマ	京都大学の今春入試結果から見た志望動向、教科分析と対策について
主な研修内容	・京大入試結果分析、動向レポート ・教科別分析会：再現答案・成績情報から見た、京大入試の状況と今後の対策について

研修報告

◆京都大学入試結果分析・動向レポート
①志願者の推移
・全体的に増加傾向にあり、特に北海道を含めた東日本及び首都圏からの受験者が増えている。
②センター試験の状況
・得点率９０％以上で合格１００％
・合格者得点率に関して、東大・京大を除いた医学部とほぼ同じ
・得点率８０％が合格者の下限値（合格者平均点８６％）
数学・理科で合格者と不合格者の平均点に差が大きかった。
③２次試験の状況
・文系学部　１５０×３（国･英・数）＋地歴１００で算出（詳細は学部による）
合格者平均は３４１点（６２％）であり、５５～６０％が合否の境界となった。
＊数学で合否者の得点率に大きな差（例えば法学部の場合、不合格者４２％。合格者７３％）
・理系学部　英語１５０　数学２００　国語１００　理科２００で算出（詳細は学部による）
合格者平均は３８０点（５８％）
（５５％以下は不合格。境界が鮮明である。２次勝負を物語っている）
工・農で５０％　　医（医）６５％（センター後の２科目目の理科対策が重要となる）
④入試変更点について
・15年度入試　ア　文系学部　地歴・公民の扱い変更
センター試験：全学部で「倫・政」の選択が可能文・法・総人（文）は２科目必須
２次試験：センター試験科目に関わらず世・日・地からの選択が可能
イ　法学部配点変更
２次の地公センター５０点を２００点に。２次５０点を１００点に変更
ウ　医学科　理科３科目必須の廃止
エ　看護学専攻　２次試験生物を必須から選択へ（物化生より２科目）
・16年度入試　ア　経済学部一般入試　選抜区分「論文」の廃止
イ　農学部　全学科制へ変更
ウ　検査技術科学専攻　配点変更　センター100点×５から国100点＋50点×４へ
エ　特色入試の導入
・実施形態　学部により、3種（AO・推薦・後期）に分かれる

◆教科別分科会（英語）
①採点について
　河合塾での京大入試問題採点基準
　誤答　単語・・１点　熟語・・２点　文法・・２点　構文レベル・・3点（単なる熟語レベルでないもの）
　１度減点された単語等については、同一の訳語が繰り返される場合は二度引きしない。
　＊2014年は、上記基準による採点と公開された点数の差が１０点弱あった。京大採点基準に変更（緩和傾向）があったかもしれないい。
②大問１（日本語訳５０点）
　（１）cheerfullyの誤訳、訳さないが多かった。
　（２）支持語（they）の訳が「それら」ではなく、「彼ら」になっている答案が多かった。
　（３）disciplineの誤訳
③大問２（日本語訳５０点）
　（１）addressの誤訳　undergraduate mathematics(学部レベルの数学)の誤訳
　　　　between A(learning~) and B(creating)の誤訳
　（２）wild（突然の突飛な）の誤訳
　（３）on the one hand（一方では）の未訳
　　　　familiar with~の誤訳（✖と親しくなる）
　　　　along with~の誤訳（✖に沿った、考慮して、等）
④大問３（英作文５０点）
　京大英作文は、勉強をやっただけ点数に現れるレベル。ただし、より早期な対策が必要である。

今後の本校での指導改善に向けて

①　英文和訳及び和文英訳指導
　本校生徒の難関大受験者、特に京都大をはじめとする英訳・和訳問題への対応が求められる生徒へは、次のような取り組みを入学時から習熟度に応じて、段階を経ながら行う必要性を感じた。
・output作業を取り入れた語彙習得（平易な日本語に直してからのtranslation）
・多義語への対応（フレーズ単位にするなど、単なる語彙テストにならない工夫）

②　減点されない文を書くための文法指導
・文構造や表現も含め、減点されない文を書くために、文法指導時においても、新規文法事項を使った例文を作成したり、それを用いたコミュニケーション活動を積極的に行う必要がある。

③　未知の情報を探る能力の育成
・京大の問題傾向から、受験生がどれだけ英文解釈を楽しめ、どれだけ既知の情報から未知の情報を探る力、あるいは、多様な答えの中から自分の答えを導く力を備えているかが試されていることがわかる。大学は研究機関であり、未来の研究者を集めているのであるから、答えのないことを試される。ゆえに京大は、多様な答案が予想される日本語訳や英作文問題を敢えてやっている。
　グローバル人材育成が急務とされる現代において、私たちにはコミュニケーション能力向上、そして真の英語が使える日本人の育成が求められており、上記で述べたような指導対象は、京大志望者に限ったことではない。本校英語科として、これまで実践してきたことに加え（情報のinput、intake活動）、さらなるoutput活動の充実が必要であろう。